

## ※顔と表層をめぐる脱修辞学、あるいは、ポール・ド・マンの反心理学

遠藤不比人

二千年にわたる心理学研究の挙句、たった一つとして心理学者が満足できる立論がある訳ではない。今日にいたるまで、心理学者たちは分裂し、幾多の学派となつて、この分野のまさに本質部分をめぐっていまだに議論が喧しいありさまである。心理学という内面の観察は、事柄の性質からして、観察者の数とはほぼ同じ数の理論を生み出すしかない。(三三頁)

——オーギュスト・コント

夢での情愛は、潜在的な内容つまり夢の背後の思考の側に属しているのではなくて、むしろその潜在内容に、対抗しているのである。それは、夢解釈による認識を私の目から覆い隠すようにしつらえている。(一八九頁)

——ジークムント・フロイト

### I

ポール・ド・マンを読むとは、いわゆる「脱構築」と呼ばれる言語の自己言及的矛盾、自己言及的な自己破壊性を非歴史的に再確認する読書行為であってはならない。非歴史的な「テクストへの執着」などとはしばしば誤読されるその読解の密度がじ

つは含意する「近代批判」とも呼ぶべきド・マンの鋭利な歴史意識を読むことが、この批評家を現在の人文学に然るべく位置付けることになるだろう。そのような認識から本稿は出発する。ド・マンの批評が鋭角的に示唆する近代批判の中で、本稿は心理学批判、その「反心理学」と評し得る批評性に注目する。それは、文学の「心理学化 (psychologization)」と、それが暗に

意味する政治性に対する根源的な批判となっている。この視点から、しばしば無批判に非歴史的・非政治的と糾弾されるド・マン——この安易な批判の代表格はおそらくテリー・イーグルトンであり、それは最新の著作まで見事に一貫している——が露わにする「脱構築」と呼ばれるテクストの事態<sup>11</sup>苦境が、「近代 (modernity)」によって強いられた言語の症候にほかならぬことを示したい。脱構築的言語とは非歴史的な言語（修辭）的メカニズムであるのではなく、「近代」それ自体の矛盾がいわば受肉した歴史的<sup>12</sup>言語的唯物性の場所<sup>13</sup>出来事である。その脈絡で、反心理学とはいかなる言語的表情を帯びるのであるか。

じつは、ド・マンにおける「反心理学」は、彼においてもっとも本質的なテーマ系であるのだが<sup>14</sup>、それを読み得る一つの重要な形象<sup>15</sup>「顔 (face)」をめぐるそれである。近代心理学史について本稿が前提とする基本的な論点をここで確認しておきたい。近代心理学は当然ながら、近代科学の一部門として位置付けられる言説であるが、その根幹にある態度は実証主義であることは言うまでもない。実証主義とは、現実に観察可能な対象を能う限り客観的かつ詳細に記述、分類することを自らに課す。ここに近代科学における視覚の特権性がしばしば指摘される所以がある。この点からすれば、近代心理学にはそ

もその成立の瞬間から——その起源からすでに——不可能性が刻印されている。言うまでもなく「心」なるものは概念として思弁可能であるとしても、それを可視化することは不可能である。それを「脳」の生理学あるいは解剖学的特質に還元することの不毛性は、フロイト以前の（フロイトの初期の仕事における）精神生理学 (psychophysiology) ないしは精神物理学 (psychophysics) を想起すれば明らかであろう。つまり、近代心理学とは、定義上不可視であるばかりか即自的かつ主観的な経験の対象でしかない「心」の可視性と客観性をその言説的な前提条件とせざるを得ない。繰り返せば、ここに近代心理学の根源的な不可能性が胚胎する<sup>16</sup>。

非常に示唆的な題目を冠した著書『魂という機械 (Soul Machine)』<sup>17</sup>において歴史家ジョージ・マカーリは、近代心理学のこの不可能性を審美的かつ想像（創造）的に解消（抑圧）した言説として、近代文学に着目する（二一九―三三二頁）。マカーリーの所論を要約してみよう。たとえばイギリス文学史においては、ジョン・ロックの経験論的心理学の不可能性を先駆的にパロディ化した言語をロレンス・スターンに読むことは容易であるが、それと相即して大量生産された文学言語たる「自伝」と「伝記」と「日記」というジャンルは、定義上不可視で主観的な領野としての「心」を、一見したところ客観的な

言語で可視化する試みと歴史化することができる。これらのジャンルは、文学という主観的な言語を使用しながらも、或る種の客観性を偽装し得る言説空間として機能し得た（この文脈において一八世紀文学Ⅱ散文Ⅱ小説における語り（手）の果たした作用と同時代の心理学との関連性は大いに興味深い主題となるだろう）。文学史において「作者の時代（The Age of Authors）」と呼称されるのは、繰り返しれば、主観的にしか経験し得ぬ不可視の「心」を、或る種の「権威Ⅱauthority」をもって語る主体の誕生を意味する。このとき「作者」なる主体の「名」が持ち得る——どこか「すべてを知っていると想定される主体」とも似ている——修辞学的な万能性をこそ、すぐに見るようにド・マンは問題とする。これに続く議論において、ド・マンが「自伝」というジャンルの修辞性をめぐり「顔」と「名前」を並列した読解を注視するが、その歴史的文脈の一端をここに示しておく。

不可視の心を可視化するという定義上不可能な心理学的かつ文学的営為は、一八世紀から一九世紀にかけて「顔」という特権的な形象Ⅱ隠喩を獲得した。むろんここで言及すべきは、この時代における支配的な医学Ⅱ心理学Ⅱ文学言説の一つ「観相学（physiognomy）」あるが、骨相学（phrenology）」である。端的にいえば、不可視の「心Ⅱ内面」が可視化あるいは外

在化されたものとして「顔」（あるいは頭蓋骨の形状）を記述・観察するための修辞学Ⅱ医学言説が、同時代の文学、心理学、精神医学の言語を通貫したことになる<sup>30</sup>。つまり、心をめぐる「内側」と「外側」、「表層」と「深層」と要約し得る空間的な差異と同一性が、強力に隠喩化されたことがここで問題とされなくてはならない。このような視点を獲得するのならば、「顔Ⅱ表層」「心Ⅱ深層」という修辞学——あるいは、この内と外という差異を解消Ⅱ同一化する「顔」という隠喩（これはまさに内と外のinterfaceと呼ぶべき交差対句法的空間Ⅱ隠喩である）——の批判的な分析が、反心理学、そして近代心理学と隠喩を共有する近代文学の原理的な批判となり得る次第が明らかになるだろう。むろんここで思い起こすべきは、近代文学における「顔」の描写の心理学的な特権性であり、ここで顔Ⅱ外は心Ⅱ内を表象・代理する極めて強力な隠喩としてその言説の中核をなした。ド・マンを通じて読解すべきは、「顔」なる形象を通じて、あくまで言語的に露出する、文学と心理学の根源的な不可能性という出来事Ⅱ歴史性である。この読解の射程に浮上するのは、顔という心のシニフィアン——深層を表象・代理する表層——が、シニフィエⅡ深層を喪失して、たんなる「もの」として露出する、いかにもド・マン的な字義性という出来事ではないか。

## II

『ロマン主義のレトリック (The Rhetoric of Romanticism)』所収の二つの論考、「脱＝顔化としての自伝 (Autobiography as De-Facement)」と「ワーズワースとヴィクトリア朝人 (Wordsworth and the Victorians)」は、このような視点から再読すべき極めて含蓄に富むテクストである。とくに前者が論じるように、ワーズワースにおいて「墓碑銘 (epitaph)」をめぐる詩的言語が身にまとう一瞬不気味な形象が、近代 (心理学＝文学) 批判という観点から本質的な意味を帯びることを明らかにしたい。

ド・マンは、墓碑銘に関するワーズワースの言語において、「太陽」が「墓碑銘」を読む特権的な主体として修辞学化される次第と詳細に注目する——「太陽が目となり、それが墓碑銘に記されたテクストを読む」。さらに、この太陽を読む (あるいは見る) テクストは、どこか異様なことに「むき出しの名前」とされる——「墓碑銘のテクストは、詩人が言うところの「むき出しの名前 (the naked name)」からだけからなり、それを太陽という目が読む」(七五頁)。ここにおける太陽という形象は、その光源としての機能と視覚の主体という点からして、

啓蒙的 (enlightenment) な科学の詩的形象と見ることができ、その後には明らかになる近代心理学批判と連動する修辞学となっている。

啓蒙的「光」の隠喩と思しき「太陽」の視線に晒されることで、無機的な墓石に「声＝命」が宿ることになる——「この段階で、感覚のない墓石の言語」について、それが「声」を獲得すると言うことができ、かくして語る石と見る太陽との釣り合いが取れる。啓蒙的光に視線を注がれることで、無機物に「声＝命」が帯びるこの比喩形象に、ド・マンは活喩法 (prosopopeia) を指摘する——「これは活喩法の比喩形象、頓呼法 (apostrophe)、つまり、不在か死没したか声なきものと呼びかける擬人化のフィクションである」(七五頁)。ド・マンはこの prosopopeia の語源に遡り、そこにおいて「顔」という比喩形象を析出する。

声は、口、目、ついには顔を帯びることになるが、この連鎖はほかならぬ比喩形象の名前 Prosopopeia の語源を見れば明らかとなる。つまりその原義は、仮面あるいは顔を授けるという意味であるのだから。活喩法 (Prosopopeia) とは、つまり、自伝の修辞学であって、それにより或る人物の名前が〔中略〕顔と同様に人に認知され記憶されることになる。こ

ここで私たちの話題は、顔を与える、奪う、顔と顔がなくなる (deface) 、 形 象、 形 象 化 (figuration) 、 脱 形 象 化 (disfiguration) を 扱 っ っ 。 ( 七 六 頁 )

ワーズワースの詩的言語における異様で不気味な比喻形、つまり、太陽の光に眼差されることによって墓石に刻まれたテキストが命と声を帯び、いわば墓石の背後にある (下に埋葬された) 死者の言葉が代弁することになる、このような修辞学は何を意味するのだろうか。その歴史的かつ政治的含意をどう解すべきだろうか? 別言すれば、背後 (足下) にいる蘇生した死者は、それにも拘らず不可視で現前することはないので、墓石の表層に刻まれた文字——あるいはその名前——が、背後に深層にいる存在の声を無媒介的に代弁する。この活喩法 (顔を与える修辞学) をド・マンは、死と生を接続する極めて強力な隠喩と見なし、この修辞学こそが自伝というジャンルを可能にする言語システムであると示唆する (七六頁)。

この修辞学をド・マンは「完璧に閉じたシステム」(七六頁)と呼ぶが、同時にこれが必然的に内包する破綻の契機にも言及する。つまり「名前」とは、自伝というジャンルを可能にする最強の隠喩として、外部と内部、生と死を接続する、あるいはその差異を審美的かつ想像的に解消 (抑圧) する比喻形 (fig-

ure) として機能するのだが、この修辞学が活喩法であることを想起すれば、この形象 (名前) は語源的に「顔」として機能することが分かる。このように、近代における自伝というジャンルの誕生は、名前 || 表層が比喻形として深層に存在する (死) 者の「声」を獲得することで、同時にその「顔」と化し、深層が表層化する修辞システムを前提とする。これは、外部 || 顔が、内部 || 心と同一化する近代心理学 || 文学の修辞学と根幹において同一のものであり、自伝というジャンルが近代文学の或る種の言説的な起源である可能性をも仄めかす。しかし、この名前 || 顔が修辞的に「完璧」に機能し、外と内の差異が解消 || 抑圧され、不可視のものが可視化されるこの修辞学的システムは——どこかフロイトの「抑圧されたものの回帰」を想起させるような不気味さにおいて——比喻形像ではない。「むき出しの名前」が露出する可能性を排除できない。太陽 (啓蒙) の光の眼差しにより、心理学化された (心 || 命を付与された) 「名前」と「顔」が「完璧な」隠喩として機能し、視覚化できぬ「内面」を外部に視覚化することで「自伝」なるジャンルを修辞学的に担保しながらも、その「顔」が単なる字義的な名前 (「むき出しの名前」として露わになる可能性がつけねにある。ド・マンが「字義性と修辞 (形象 || 顔) 性の対立」(The opposition between literal and figural) (七七頁) と呼ぶのは、

近代的な自伝というジャンルに潜在する構造的かつ歴史的な亀裂を含意し、繰り返せばそこにおいて、抑圧された「むき出しの名前顔」が不気味なことに、単なる字義性として露出(回帰)する可能性が残存している。それは墓石が単なる墓石となる瞬間でもある<sup>50</sup>。

ワーズワースのテキストは、墓碑銘をめぐる活喩法に依存しながら、生と死、表層と深層、顔と心を隠喩的に同一化するのとまったく同時に、この修辞学を多用するグレイとミルトンを揶揄する(七七〜八頁)。この脱構築性が示すのは、この修辞学が潜在的に孕む論理的な混濁であり、それは「活喩法に伏在する潜在的危険性」つまり「死者に語らせることによって、この修辞学の(生と死という)左右対称の構造が、同じ理屈から生きている者が声を失い、死によって凍結されてしまう可能性をも含意してしまう」(七八頁)ことである。

墓碑銘(墓石)が「顔」となり「声」を得て語り出すというワーズワース的修辞学(活喩法)は、外部が内部を無媒介的に表象・代理するという構造からして、「肉(体)的なもの(incarnate)」あるとは「衣服(clothing)」という隠喩と親和性が高いが、この詩人の言語はこの隠喩性に関しても批判的である。

しかし身体を覆う肉と衣服は、それが表象・代理する思考内容に反して、少なくとも一つは共通の特質を有している、すなわち両者が目に見えること、五感に開かれていることである。少々前の箇所でもワーズワースは、同様の隠喩を使用しながら、正しい種類の言語とは「身体に対する衣服の関係ではなく、魂に対する身体の関係」であると特徴付けている。この衣服——身体——魂という連続は、実際に、完全に一貫した隠喩的連鎖である、つまり、衣服は身体が目に見える外部であって、それは身体が魂の目に見える外部であるのと同断である。ワーズワースが激しく糾弾する言語とは、じつのところ、隠喩、活喩法、修辞的な言語であって、それは不可知のものを心と感覚に接触可能にするようなあの太陽の光が形象化する認識のあり方である。(七九〜八〇頁)

不可視のもの(魂=心)を可視化することは、命なきもの(死者)に声=命を授けるという隠喩(活喩法)を得るのだが、その修辞学において、墓石に刻まれたテキスト(あるいは名前)たる墓碑銘は、埋葬された死者になり代わって語る「顔」となる。しかしながら、これらすべてが、ワーズワースの詩的言語(修辞学)が可能にする事態であるのなら、ド・マンが結論するように「言語が比喩形象(隠喩、あるいは活喩法)である限

り、言語はものそれ自体ではなく、その表象・代理、いわば、そのものを描く絵であるので、それは、絵が声を持たないのと同じく、沈黙し語らざるものである」(八〇頁)。つまり、自伝という形式が、不可視でもの言わぬ「心」に「顔」と「声」を付与する言語行為(修辞学)であるとしても、言語はあくまで「心」の表象・代理にすぎないのであるから、「心」それ自体ではあり得ない。それゆえに、自伝という「心」に顔を与えるこの修辞学は、顔＝声を与えるという言語行為それ自体によって、「心」から声＝顔を奪っていることにもなる。別言すれば、この修辞学(自伝)は不可視の心を可視化し蘇生しながら、それとまったく同時にその殺害と埋葬を遂行してしまう。この論考の結語(Autobiography veils a de-facement of the mind of which it is itself the cause)(八一頁)の意味するところをこのように解釈することができる<sup>66</sup>。ここにおいてあからさまに出来しているのは、顔を授けること(facing)と顔を奪うこと(de-facing)の決定不能性、顔(face)をめぐる比喩形象(higure)の自己言及的な解体現象(disfiguration)であるが、これは断じて非歴史的な修辞学システムの脱構築性ではない。この言語的かつ唯物的な出来事は、近代文学＝心理学の根源的な不可能性というすぐれて歴史的な「アレゴリー」として読まねばならない。この不可能性が、「顔」をめぐるテキストの修辞

学の脱構築という歴史的な症候と化したのである。

### III

ド・マンは「ワーズワースとヴィクトリア朝人」において、この修辞学(活喩法)の脱構築をより明示的な心理学批判として提示する。ワーズワースの言語において「心」が隠喩化される文脈に関してド・マンは、「現象学的かつ実存的な」(八六頁)言説を指摘する。つまり、ワーズワースに特有の突如人間の主体を襲う外傷性——ワーズワース的「ショックの体験」(ベンヤミン)とも呼び得る瞬間——が「外部」として隠喩化されると同時に、そういった「つねなる脅威となっている破壊(ever-threatening undoing)」を英雄的に凌駕することが「意識の勝利」として言祝がれる。これが「心の現象学化」であり、そこで特権化されるのが「意識の或る条件」あるいは「自己内省的で回想する心(self-reflecting, recollecting mind)」(八七頁)である。これは「名もなく定義もできぬ」外傷的な遭遇をいかなる修辞性にも還元不能なものとして露出しながらも、まったく同時に、その外傷性を「馴致する」(八六頁)隠喩として「心」が現象学(実存)化されるワーズワースの哲学となる。つぎの一節はその詳細と次第を語っている。

穏やかなものであれ暴力的なものであれ、その脅威のショックのなすがままになることで、心はそれ自身に対しても世界に対してもその全能性 (empire) を回復する。というのもワーズワースの修辭的言語使用の奇跡とは、審美的回避をするのではなく、いわば脅威と直接遭遇する (face to face) 心の脆弱性を語ることによって、空、大地からなる現象学的世界の全体性を回復し、いかなる色彩や韻律がなし得るよりも深い意味において、美的なものを拒絶するまさにその過程において美的なものを回復するのである。(八七頁)

これをワーズワースの「消極的能力 (negative capability)」と呼ぶべきだろうか。心||内部、世界||外部という空間的隠喩を組織しながら、ワーズワースの詩的言語はこれを顔と顔の (face to face) 外傷的遭遇として形象化しているが、そのとき「顔」という隠喩は「心||内」と「世界||外」だけでなく、顔という形象それ自体の形象 (figure) と脱形象 (disfigure) がほとんど無媒介的に遭遇する場所、そのインターフェイス (interface) となっていないか。なぜならこの箇所において「顔」は、外傷的体験の主体とその対象を同時に表象する形象と化しており (それゆえに face to face) 、それは心の隠喩であ

るばかりか、それを破壊し得る外傷的外部のそれともなっている。これは先ほど見た、顔を与える (face) と顔を奪う (op face) の全き同時性と同じことを語っている。美的なもの (修辭学) の生産がその解体を同時に意味するド・マンの出来事ここで確認してもよい。あるいは美的なものの解体それ自体が美的なものになる瞬間というべきか。

さらにいうのなら、ワーズワースの詩的言語と心理学との遭遇それ自体がこの種のインターフェイス (face to face) が出来る言語的な場所となっていないか。

実際に使用されている連合心理学の専門用語を喚起するまでもなく、明らかにここで記述されているのは、それ自体では無力である眼を、より大きな、全体的な実体であり「同じ物体」であるもの、テキストの内的論理からして顔でしかあり得ぬものに書き込む可能性であり、この顔とは、心が提喩的に機能しつつその存在を主張する部分を総合したものであって、この詩の数行先で、万物を包含し得るまで増大する全体化のプロセスの道筋を示す。(九一頁)

この意味論的に濃密な一節が語っているのは、近代心理学 (連合心理学) の用語に依拠しながら、人間理性の根幹にある

「心」を視覚に局所化するワーズワースの言語が、強力な隠喩として「顔」を前景化する次第と詳細である。しかしこの啓蒙理性の万能感を体现する顔と視覚の優位は、同時代の心理学への言及を通じて批判もされている。ワーズワースは、ハートトリーと思しき「字義的な知性の心理学者」の「魂の分析」を否定し、科学による「外側への証明 (outward shows)」という杜撰な知性に対する自身の「心の理論」(九一頁)を構築しようとする。ワーズワースの墓碑銘をめぐるテキストで採用された「顔」を読む＝見る「太陽」が、ここでもう一つの「顔」となり、啓蒙理性における視覚の優位がふたたび強調され、それゆえ眼という器官を駆使する「顔」がその特権的な隠喩と化したことになる。しかしながら、これが意味するのは、啓蒙的科学における観察の主体(顔)と観察の対象(顔)が同一の隠喩を共有することであり、図らずもここには近代心理学の不可能性が、隠喩あるいは比喩形象のインフレイション (disfiguration) として露出してはいないか。つまり、心という即自的な経験の対象でしかあり得ぬ領野を近代科学の対象とすれば、その主体のあり方は究極の水準で、自らの心＝顔を観察する自らの心＝顔という鏡像のかつ同語反復的な認識空間を生きななければならないまい。ここにあるのは、近代心理学の不可能性のアレゴリーとしての、不可能な修辭的インターフェイス (face to face)

と呼ぶべき、顔の過剰(授与)と顔の欠如(篡奪)の同時性であり、修辭学の過剰によるその欠如としての defacement = disfiguration にはかなるまじ。この修辭学的苦境は、自伝というジャンルの可能性をめぐってド・マンが言う「テキストの著者とテキストの中の著者」という「鏡像的ペア」(七二頁)と同断であろう。繰り返しになるが、「顔」をめぐる修辭学の脱構築としてのこのテキスト性は、「心」を表象する近代心理学＝文学の根源的な不可能性が症候的に露出した「歴史的」な言語＝出来事にほかならない。このような言語との遭遇を「もはや実存のあるいは心理学的原因に還元することはできない」(九二頁)のはむろん、このような言語的体験を回避しながらワーズワースにおける「意識の勝利」を語り続けるのなら、それは「近代」という外傷から逃れる別の症候と見なさなければならない(じつはそれこそが「近代文学」の制度それ自体にはかならない)。

#### IV

「顔」という「表層」が無媒介的に表象・代理する「心」というパラダイムを近代文学と心理学の根幹部分に見るのならば、ド・マンのワーズワース読解は冒頭で触れたように、その「反

心理学」あるいは「反近代文学」とも呼ぶべき歴史意識を指し示している。その点からすれば、ド・マンが露出するワーズワースにおける修辭学的苦境——「顔という隠喩の主張それ自体が顔という隠喩によって無慈悲に無化される作用」(九二頁)——とは、この詩人の詩的言語がいわば身を呈して体現する心理学の不可能性それ自体の唯物的表出である。深層⇨心を無媒介的に表現する表層⇨顔 (Face ⇨ surface) なる近代的パラダイムを主題化するテキストが、自らの表層⇨顔⇨比喻形象 (figure) を歪め (de-face ⇨ disfigure) ながら、その不可能性のアレゴリーと化していく。

このような言語的⇨修辭的⇨歴史的現場に遭遇するとき、ド・マンの批評が複数の「歴史的」な読解に開かれていることが判明する。たとえば、或る種のモダニズム論が、「反肖像 (Anti-Portrait)」という論点から二十世紀的な言語を歴史化し、その反心理学を「顔⇨表層」の不透明性に読解するのと連動して、モダニズムを反心理学の系譜に位置付けることも可能であるだろう。その射程には、心⇨無意識がテキストの表層を「歪曲 (distort: entstellen)」するフロイトの「夢作業」が浮上してくるのかもしれない。思えば、フロイトの夢テキストとは、深層 (潜在内容) たる無意識を表層 (顕在内容) として生産する隠喩的なプロセスであったが、それは同時に、ド・マンが読

むワーズワースの言語のごとく、表層化 (facing) と歪曲化 (de-facing) が同期する修辭学的隠蔽作業であった。この露出と隠蔽の並走という言語的事態は、顔を与えること (facing) が顔を奪うこと (de-facing) を意味するワーズワース的なテキストを即座に連想させないだろうか。ド・マン⇨ワーズワース的「顔」は、啓蒙的知性の万能感の隠喩としてあらゆる細部を提喩的に「統合する力 (totalizing power)」に見えて、じつは「無限に差異化する過程 (a process of endless differentiation)」が無慈悲に露出する場所であった。その「ほぼ完全な混沌 (near-total chaos)」(九二頁) と呼ばれる「顔⇨表面」の意味 (論) は、原型を留めぬまで歪曲されたフロイトの夢テキストの表層が単一の解釈を阻み続け、それを細部へと分断し去る様と似ている (ここで「イルマの注射の夢」を思い出そう)。確かにフロイト自身が語るように、夢解釈とは「《細部》解釈とも言わべき解釈であって、《全体》解釈ではない」(一四二頁)。夢テキストの歪曲された表層 (de-face) とは、無数の無意識的表象に過剰に意味を与えられた／奪われた (歪曲された) 細部が無秩序に散乱する意味論的なカオスと言ってよい。ここで私たちは、フロイトの「イルマの注射の夢」をフロイト的夢理論の不可能性的アレゴリーとして読解する誘惑にかられる。ド・マンの批評を症候としての「心理学」への抵抗と読む

とき、過剰な細部へと無限に差異化するワーズワースの言語の歪んだ「顔」とフロイト的夢テクストの「歪曲」を接続しながら、そこに反近代としての反心理学の系譜を読むことができるだろう。その歴史性こそが彼らのテクストの顔＝表層を歪めているのであり、その脱構築的な苦悶の表情は歴史そのものの唯物的な出来事となっている。

※本稿の議論は些かの修正と変更を経た後に、*“Face and Surface Disfigured: Paul de Man, Wordsworth, and Freud”* という題目を得て以下の国際会議の基調講演として口頭発表された。Behind the Masks: Representations of the Face in Japanese and Western European Literature and Theatre from the Early Modern Period to the Present (University of Edinburgh) 二〇一八年十二月十四日。

## 註

(1) この論考で読解した「内」と「外」という空間的な隠喩化による文学の心理学化の根源的批判を、ド・マン、フレドリック・ジェムソン、柄谷行人、ヴァージニア・ウルフ、ロジャー・フライといった固有名とそのテクストに即して論じた拙稿として『情動とモダニティ——英米文学／精神分析／批評理論』彩流社、二〇一七年の序章「情動と二〇一七年の近代心理学Ⅱ文学の内／外部に宿る「もの」」を参照されたい。本稿が示唆するのと同じく、本著においても「近代」が露出する「外傷」を回避する美学としての文学Ⅱ心理学を原理的に批判する言説として「モダニズム」を歴史化

している。その観点から、フロイトの精神分析とド・マンの批評の意想外な親和性についても議論されている。

(2) 近代心理学のこの意味での不可能性とこの不断の対話を通じて成立した言説としてフロイトの精神分析を再歴史化する優れた著作として、George Makari, *Revolution in Mind: The Creation of Psychoanalysis* (Harper, 2008) を参照されたい。複数の近代心理学からの引用＝逸脱あるいは編集としての精神分析という歴史記述は本稿の文脈においても大いに示唆的である。ちなみに本稿の著者による翻訳がみずす書房により近刊の予定である。

(3) 「魂という機械」という題目が示唆するのは、直接的には経験主義的文脈において言説化された近代心理学が信仰と経験主義の科学という矛盾に引き裂かれていた事態であるが、根源的に表象不能な「心」なるものを表象する試みである近代科学の言説的苦境一般も暗示する。実際に「脳科学」の進歩が顕著な現在にあっても「まだに巨大な「謎」であり続ける「心」は新たな宗教的言説の契機ともなっている。この論点による本著に関する本稿の著者による書評は、以下のウェブ上で参照可能である。*Medical History* (Cambridge UP): <https://www.cambridge.org/core/jour>

nals/medicalhistory/article/makari:george-soul-machine-the-invention-of-the-modern-min-d-new-york-and-london-norton-2015-pd-xvi-656-3896-hardback-ISBN-978-0-393-05965-6/73AD0C63F7687F0C708DB3083402E36

(4) 観相学を典型とする一九世紀的なこの種の顔をめぐる修辞学を精査して、それへの抵抗としてモダニズム文学の「反肖像」性を読解する研究として、Kamila Pawlikowska, *Anti-Portraits: Poets of the Face in Modern English, Polish and Russian Literature* (1835-1965) (Brill/Rodopi, 2015) を参照。本稿の最終段落で言及するモダニズム文学研究の優れた一冊となっている。さなみに或る種のゴシック小説において「顔」の表象が不在化する現象をどのように歴史化するべきなの

#### 引用文献

Comte, Auguste. *The Positive Philosophy of Auguste Comte*. Trans. H. Martineau. AMS Press, 1974.  
De Man, Paul. *The Rhetoric of Romanticism*.

か、本稿の視点からそれを考察することが必要であるかもしれない。(1)で想起すべきは『フランケンシュタイン』『シキルとハイド』のようなテキストである。つまりこの種の言語を「反心理学」という系譜に位置付ける可能性は考察に値するだろう。

(5) ニコラス・ロイルは「不気味なもの」の重要な歴史性として、前近代のかつ神学的な言説の布置にあって十全な意味を帯びていたものが、近代的な啓蒙科学の対象となることで既知のものが不可知なものと化す事態を分析している。この外傷性を補強する言説としての近代心理学＝文学批判が、ここで説まれるド・マンの主題であることは言うまでもない。その意味で、繰り返せば、或る種のモダニズムの言語は鋭利な近代批判となっている。こ

Columbia UP, 1984.

Makari, George. *Soul Machine: The Invention of the Modern Mind*. Norton, 2015.  
シークムント・フロイト『フロイト全集 夢解釈

の視点からD・H・ロレンスの『虹』を再読した論考としては、拙稿「情動、モダニティ、不気味なもの——D・H・ロレンスの反心理学をめぐる覚書」『D・H・ロレンス研究』第二十八号(二〇一八年)を参照のこと。この議論が準拠したロイルの著作は、Nicholas Royle, *The Uncanny*. Manchester UP, 2003 である。

(6) このように読まれるド・マンによる「自伝」の不可能性という議論を、ションヤナ・フェルマンのド・マン読解を通じて、彼の自伝的事実(反ユダヤ的記事の執筆)へ接続することの不/可能性を精緻に論じたのは、中井亜佐子『他者の自伝——ポストコロニアル文学を読む』研究社、二〇〇七年、特に一九三―九七頁である。

Ⅰ『第四卷』新宮一成訳、岩波書店、二〇〇七年。